

| | |
|------------------|---|
| Title | 転び伴天連トマス・アラキについて |
| Sub Title | Araki Thomas ; the secular priest apostate of the Catholic church of the 17th century Japan |
| Author | 高瀬, 弘一郎(Takase, Koichiro) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1978 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.48, No.4 (1978. 3) ,p.1(337)- 26(362) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19780300-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

転び伴天連トマス・アラキについて

高瀬 弘 一 郎

キリシタン史上、特異な重要性を持っている日本人教区司祭トマス・アラキについて取り上げてみたい。トマス・アラキの略伝としては、刊本に記述されたものでは、バルトリ著日本イエズス会史の記事が最も古いものの一つと言えると思う。そこには次のようなことが書いてある。

「多年前に、トマス・アラキという名の日本人の若者が長崎からローマに行った。私は彼をそう呼ぶが、彼はまたピエトロ・アントニオとも呼ばれる。同時に別の人々はトマスと呼ぶ。適当な学習過程をおえて司祭に叙品され、そして当初と同じ航路を戻り、スペイン、ポルトガル、インド、シナを通過して長崎に戻った。しかし彼は、後に非常に不誠実になったところに示されているように、以前から邪悪であったためか、或は故国に対する愛又は配慮が彼を変えたものか、彼はマカオで少なからぬ日本人に会って、彼等の心に福音説教者達への憎悪を植えつけた。そして、或る説教者達（その修道会の名も言った）が日本征服のために強力な軍隊を送るよう国王を扇動するのに最大の努力を払ったこと、イエズス会士達がそれに反対したことをマドリッドで耳にした、と断言した。彼は帰国して後、このわれわれの世界について、また信仰と修道会の繁栄について、自分に尋ねた凡ての人々に話して聞かせた。その修道会の内、イエズス会はポルトガルから

東インド經由で航海し、他の三修道会はスペインから西インドを経て航海をした。しかし彼は司祭であって、まだ背教者ではなかったし、一方激しい迫害が行われていたので、自分の身を守って長崎に隠れていたが、結局見つけられて奉行所に連行され、翌朝大村の牢に送られた。彼は夜そこから逃亡を企て、堀をよじのぼって、その上からとび降りた。しかし程なく、後悔したためか、彼が隠れている所を知っているものと思われたために拷問を受けて死に瀕していた一人の婦人の生命を救うためか、又は恐らく彼と結託していたものと思われる奉行との合意によって、再び彼の手に捕えられ、鈴田の牢に入れられた。そこでパードレ・カルロ・スピノラやその他の仲間達から喜びの讃歌で以って歓迎された。しかし一人の人間の好運による全体の喜びは短かいものに終わった。彼は、本当は幸せであったにも拘らず、そうは考えないで、自分を不幸な者と思った。即ち、他の人々は信仰のため、神の光栄のために苦痛を受けることを無上の喜びとしているのに、彼は心がゆがみ、これを悲しんだ。あらゆることを苦しみと不快に変えた程である。天国を見出したのに、それを煉獄に変えてしまった。そして初日以来、悲劇的結末について予想されたことは的中した。即ち、三週間しか堪えられなかった。この不幸な人は異教徒の奉行に書送り、卑怯にも命乞いをした。それを確実に達成するために、司祭の権威・階位・職務を放棄した、と語った。キリストの法をも棄てた。そして、その法は何ら益にならないから、もう決して人に説教したり、教えたりはしない、と約束した。彼はそのような人間であった。彼の頼みは聞き届けられて釈放された。どのような利益になったのか知らないが、何人かの人が裏切ったのは、この恐ろしい罪が原因だと考えられた。そして名声の失墜は良心において回復されるに相違ない。奉行はこの真相を尋ねられて、この事実だけでなく、同背教者の自筆の二通の文書を公表した。そこにおいて、当初の、司祭職と信仰の放棄を一層莊重に再確認した。キリスト教徒達に対して比類ない蹟きと弊害になった。心が動揺した者も少くなかった。又既に罪を犯した者は、仮面を脱いで己れをさらすだけの勇氣がなく、背教者として姿を現した。あの不幸な人の悪行はこれだけにとどまらなかった。というのは、彼は罪を犯した

だけではなく、破局に陥れてしまったからである。彼は、日本に潜伏しているイエズス会士で自分が知っている者の名前を凡て書いて奉行に与え、その所在とこれに宿を貸した人々についても教えた。その上、更に厚かましくも、恥の上塗りをするために、聖衣を身につけて江戸の政庁に赴き、福音の説教者達に対する攻撃をした。しかし裏切者として軽蔑されて信用されず、ただ平蔵のために、当初は親密であったアントニオ当安を死に追いやるのに手を貸すことが出来ただけであった。即ち、先に述べたように、彼が告発したために当安は斬首された。その後下^{シモ}に戻ったが、長崎に姿を見せるのを恥じて平戸に隠れた。そして極めて不道徳で不倫且つみだらな生活を送り、半ば無神論以上のことを口にした。その後再び鈴田の牢に姿を現わした。⁽¹⁾」

バルトリの日本イエズス会史には右のように記述されている。後のシャルルヴォワの日本誌に記されているトマス・アラキの略伝も、バルトリの記事と大体同じであり、⁽²⁾シャルルヴォワがバルトリの記事を参照したと考えてよいであろう。右のバルトリ著日本イエズス会史に記述されているアラキの略伝は、教会側文献特有の型にはまった表現の中にも、簡単ではあるが彼に関する多くの重要な問題に触れていると言える。以下、他の史料で以ってこれを補ってトマス・アラキの生涯を調べ、キリシタン史上におけるその問題点をいくつか指摘してみたい。

二

まずトマス・アラキの出生については、生年・生地その他不明である。出生のみか、彼は聖職を志してローマに留学する段階になって、初めて記録に現れる。一六一二年十月十日付長崎発、司教セルケイラのイエズス会総会長補佐アントニオ・マスカレーニャス宛て書翰に次のように記されている。

「日本人パードレ・アントニオ⁽³⁾の徳操について尊師が寄せた朗報は私を慰めた。というのは、これは学問よりも重要な

ものだからである。⁽⁴⁾

この史料によって、総会長補佐がローマから日本司教に書翰を認めた当時、トマス・アラキは既にローマにあって司祭の叙品を受けていたことが判る。同じセルケイラの書翰には、同一六一二年の八月と九月に、東インド経由とフィリピン経由の双方から一六一〇年四月十三日付、一六一一年一月付、一六一一年六月十七日付の三通の総会長補佐の書翰を受け取ったことが記されている。⁽⁵⁾ この内のいずれにトマス・アラキについて記述されていたかは不明であるが、一六一〇年四月乃至一六一一年六月には、彼は既にローマで司祭に叙品されていたわけで、従って彼が日本からローマに渡った時期は、更にそれより何年も溯ることは確かである。この点に関連して、慶長十四年（一六〇九年）正月十一日付でクリンタ^(伴天連)ンバテレトマスなる者が暹羅宛ての朱印状の交付を受けている件に触れておきたい。この朱印状の交付を受けた伴天連トマスについて、ボクサー教授はその著書の中で、「これは恐らくはトマス・アラキのことであろう。」⁽⁶⁾と記している。しかしながら、右に述べたように、彼は一六一〇年四月乃至一六一一年六月にはローマにいたことが確実である許りか、その何年も前からローマに滞在していたことが推定出来るので、朱印船の伴天連トマスとトマス・アラキを結びつけることは出来ない、と言わねばならない。

アラキとイエズス会との関係であるが、彼がイエズス会士であったかのように記している文献もある。例えばマードクは「日本人イエズス会士アラキ」⁽⁸⁾と書き、ボクサーも「彼は日本に帰国して後貞潔の誓願を犯したためにイエズス会を追放された。」⁽⁹⁾と記している。しかしながら、彼が曾てイエズス会に所属していたことを明らかにする記録はないようである。⁽¹⁰⁾

アラキは、イエズス会に入会したことはなかったが、イエズス会とかなり交渉があったことは確かである。前引一六一二年十月十日付セルケイラの書翰に見えているように、アラキの消息が総会長補佐から日本に寄せられたことは、ローマ

において、アラキがイエズス会と接触をもっていたことをうかがわせる。後で述べるように、彼は後にローマ・セミノリオの服を身につけて長崎奉行の許に出頭している。これは、彼が同セミノリオに学んで司祭叙品を受けたことを物語っていると言えよう。このローマ・セミノリオというのは、トリエント公会議の決議に従って、教皇ピウス四世とミラノ大司教ボロメオが中心となって一五六五年にローマに開設されたセミノリオのことであろう。そしてこのセミノリオは、ボロメオの方針で、当初はイエズス会士達が教師に起用された⁽¹¹⁾。アラキがこのセミノリオに学んだということも、彼とイエズス会との関係を裏付けるものであろう。ローマで彼を寵愛したベラルミノ枢機卿もイエズス会士である。

それではアラキは、何故日本でイエズス会経営のセミノリオ、コレジオに入学して学習をせずに、ローマにまで行って司祭になろうと志したのであろうか。この点について一六一三年十月四日付京都発、チェルソ・コンブアロニエリの総會長補佐宛て書翰に次のように記されている。

「最後に左程重要でない別のことを申し述べたい。即ち、先年ピエトロ・アントニオ・アラキという一人の若者が自分の意志で日本からローマに行った。ローマからの書翰によると、彼は小国王の子と思われ、その後を継ぐなどと思いをしているようである。というのは、彼は身分低い生れで、母親は自らの労働で自活していた。またこのピエトロ・アントニオは、能力が示されなかったためにセミノリオに入ることが許されなかったか、又は入学は許されたがそこに留まることが出来なかったかのいずれかである。彼は日本に帰りたいたいと言いだすかも知れない。しかし、それによって何らかの弊害をきたし、異教の諸地方の教化にはならないで躓きとなり、破壊を招き、カトリック教それも殊に聖職者の間に混乱をきたすということを尊師に申し上げたい。というのは、人は褒めることよりも悪口を言い勝ちなものだからである。従って、われわれは彼がこの地に戻ってくることを恐れている。彼は当地で余り尊重されないであろう。彼が何か適当な教会の要職について、当地に気持よく入ってきて留まるようにした方がはるかに優れているであろう。しかし最も適切なよ

うに御地で判断していただきたい。⁽¹²⁾」

これは、ローマにいるトマス・アラキのことに言及した、在日イエズス会士の文書として、前引一六一二年十月十日付セルケイラの書翰に次いで古いものと言える。そして右のコンファロニエリの書翰は、いくつか興味深い事実を明らかにしている。まず、これはセルケイラの書翰より一年後のものでありながら、尚アラキのことを「ピエトロ・アントニオという一人の若者」と記しており、彼が既に司祭になっているのをコンファロニエリが知らなかったか、又は知っていても故意にそれを無視するかのような態度を見せている。次に、アラキは身分低い家の生れで、生活もかなり困窮していた様子が判る。また、彼がイエズス会経営のセミナリオに受入れられなかったのは、能力の点で劣っていたからである、とコンファロニエリは述べている。しかし、後にローマで勉強して司祭となり、ベラルミノ枢機卿の寵愛を受け、勝れたラテン語の力を身につけたことが判っているトマス・アラキが、セミナリオで学習するだけの能力に欠けていたとはとても考えられない。私は、彼がイエズス会セミナリオに受入れられなかった主な理由は、そのようなことではなく、コンファロニエリが右の書翰の中でアラキについて多分に侮蔑の気持を込めて書いているところからも窺えるように、アラキの生れの貧しさ、身分の低さにあったのではないかと思う。即ち、彼は日本でイエズス会経営のセミナリオで勉強すること——そして恐らくはイエズス会へ入会することを希望しながら、全く不本意な理由でそれを拒まれたのであろう。そして、それがまた、彼がイエズス会に所属せずに教会聖職者になる道を志した動機となったのであろう、と考える。

更に、コンファロニエリの書翰には、トマス・アラキが帰国すると教会に混乱をきたし弊害を招くであろう、と述べ、彼の帰国を在日イエズス会士は恐れている、と記述されている。これは勿論、実際に経過したように、彼が帰国後棄教して迫害者の手先になる、というようなことを予想した言葉でないことは言うまでもない。これは、イエズス会の統制を受けずに一日本人がローマで学問をして、知見を広めて帰国することに対するヨーロッパ人イエズス会士の恐れと見ることに

が出来よう。そしてアラキは、帰国後、コンファロニエリ等が予想した以上に、キリシタン教会にとって恐るべき敵となつたと言える。

三

彼はその後ローマを發つて帰国の途につき、一六一四年八月七日にマカオに着いた⁽¹³⁾。彼のマカオ滞在中の動靜に關連して、一六一八年三月五日付日本發、フランシスコ・パシエコの總會長宛て書翰に次のように記述されている。

「更に巡察師は、三人の日本人イルマンと何人かの説教者の同宿をも追放した。彼等は、もうイエズス会には入れてもらえないということを聞いたため、また要望しても學習をさせてくれないために、マカオで反抗した。彼等は日本に來た。そして同胞達の心をイエズス会から離反させ、他の同宿達に対し、教会を去り、パードレ達を見捨てるよう説得している。そして、パードレ達に宿を貸しつながらなかつた日本人達の悪口を、何人かのパードレが日本から巡察師に書き送つた、と語つた。長崎の日本人達はそれを非常に悲しみ、そのようなことを書き送つたパードレを即刻イエズス会から追放するよう管区長への伝言を頼んだ。これに激昂したためと、日本を統治している將軍^{シヨウゲン}のことを非常に恐れたために、彼等は重立つたパードレ達を日本から去らせてほしい、と管区長に言つた。しかし管区長は、この難局に際して慎重に最善をつくしてあらゆることに対処している。日本人は尊大且つ傲慢なので、日本人教区司祭を導入したいと思つていゝのではないか、との疑惑と臆測を招いている。われわれイエズス会の日本人パードレがそれに与して、ヨーロッパ人を排除したいというような氣持を起さないことを願う。それ故、日本人を叙品する場合には、極めて慎重に行ふ必要がある。ローマで叙品された教区司祭トマ・アラキは、当地では余り役に立たなかつた。というのは、マカオから書き送られてきたところによると、彼の説得により、何人かの同宿が動揺してイエズス会を去り、インドに行った。一、二名の者はヨーロッパ

にまで行った。そこで教区司祭になろうと志してのことであった。これは決して適切なことではない。⁽¹⁴⁾

即ち、その当時におけるイエズス会内のヨーロッパ人パードレと日本人との間の関係と、そこにおけるトマス・アラキの動向が記述されている。マカオにおいて、学習を望みながらそれを許されず、入会も出来そうにない、ということを知った日本人のイルマンや同宿達が、ヨーロッパ人パードレに対して反抗し、双方の間が険悪な空気になったという。マカオには、日本とシナに向けるパードレを養成するためのコレジオがヴァリニャーノによって作られていた。曾てヴァリニャーノは日本人聖職者の養成に熱心であったが、その後日本イエズス会の中で日本人に対する評価は低下する一方で、その旨ローマの本部に寄せられた報告は夥しい量に上った。そしてそれに応じて、イエズス会総会長は一六一五年二月一日付日本管区長宛て指令で以って、日本人はパードレにするより同宿として働かせる方が役に立つので、ラテン語などの学習をしたいなどという気持を起させてはならない。日本人のイエズス会入会や司祭叙品は、本部が許可するまでは認めてはならない、ということ⁽¹⁵⁾を命じた。総会長がこのような指令を与えた以上——一人総会長だけでなく、在日ヨーロッパ人イエズス会士の多くが同意見であったわけであるが——いかに日本人同宿がパードレになることを目指してマカオに渡っても、そこで学習をして司祭になるなど、とても叶わぬことであった。ヨーロッパ人パードレが曾てそのような夢を彼等に与えたこともあったであろう。同宿の中から、このような会の方針に対して敢然と抵抗する者が出てきたのは当然の成行であったと言えよう。

ところで、右のパシエコの書翰に記述されているように、ヨーロッパ人会員に反抗した日本人イルマンや同宿達は勿論イエズス会を追放されるが、彼等は日本に帰ってきて、日本人の心をイエズス会から離反させ、同宿達に対してイエズス会を去るようにいろいろ働きかけたという。イエズス会が、ヨーロッパ人会員と日本人との間にこのような厄介な問題を抱えていたところへ、恐らくは曾てイエズス会入会を志しながら誠に不本意な理由でそれを断られ、そしてそのために独

自の立場でローマで学問をして教区司祭となったトマス・アラキが、帰国する途中マカオに立寄り、前述のようにイエズス会パードレになる道を殆んど絶たれて強い不満を抱いていた日本人同宿に対して、イエズス会を去って教区司祭への道をすすむよう説得したわけである。このような状況下のマカオにおいて、自らその志を達成してきたトマス・アラキによる働きかけは、相当地に大きな効果があったことであろう。事実、何人かの同宿はこれに動かされてイエズス会を去って、教区司祭になるためにインドに行き、更にヨーロッパにまで渡った者もいたという。アラキが及ぼした影響の大きさを窺い知ることが出来る。そして、ヨーロッパ人イエズス会士の立場からすれば、このような日本人の動向は極めて憂慮すべきものであったことは勿論で、先に引用したように、コンファロニエリが、アラキの帰国はキリシタン教会に混乱をきたすと言って危惧していたことが、早くも現実のものとなったわけである。しかしながら、右のフランシスコ・パシエコのように、日本人が教区司祭の方に走る動きが見えたことに対して、それを単に日本人の「尊大且つ傲慢」な性格に帰因すると見るだけで、ヨーロッパ人イエズス会士の日本布教に取組む基本的姿勢やその日本布教政策を振り返ることをしないのがイエズス会内の大勢であったとすると、それは既に硬直してしまっただけのキリシタン教会の体質を示すものであり、も早布教地に順応してゆく柔軟性と、教勢を進展させる活力とを失ってしまったと言わねばならないであろう。

ところで、アラキが日本人同宿に対してイエズス会を去るよう説得したのは、右に述べた、イエズス会パードレの許にいたのでは、終始その支配下に置かれたまま司祭になる道が殆んど鎖されてしまっている、といった言わば卑俗な思惑だけではなかったようである。一六二〇年三月二十日付長崎発、マテウス・デ・コーロスの総会長宛て書翰に次のように見えている。

「同教区司祭（トマス・アラキのこと——引用者）は、マカオにおいてイエズス会の日本人イルマン達に対して次のように語った。即ち、自分はマドリッドにいた時、日本征服を企てるよう托鉢修道士達が国王に働きかけたこと、そしてイ

エズス会パードレ達がそれに抵抗したことを知った、と。⁽¹⁶⁾

キリシタン布教事業に秘められた武力侵略の野心についてアラキが語った、ということ伝える記録はこれ以外にもいくつかあるが、ただ右の史料は、彼がマカオにおいてイエズス会の日本人イルマン達にそれを述べたことを明らかにしている点、ここで重要な意味を持っている。文中に、托鉢修道士による日本征服への策動に対し、イエズス会士が抵抗したことが記されているが、これは日本がスペインの勢力下に入ることに対する抵抗であって、決して日本の国益を守ろうとした動きでないことは言うまでもない。アラキは、スペイン系托鉢修道会であれ、ポルトガル系イエズス会であれ、植民列強と結びついた修道会を主体とした布教事業のあり方に対して、日本人の立場から強い疑問を感じたものと推測出来る。アラキがマカオで日本人同宿に対し、イエズス会を去って教区司祭になるようすすめたというのも、イエズス会にいたのでは冷遇されるだけで昇進が望めない、といったような思惑からだけではなく、より根本的な問題として、このように植民列強と結びついてその国家事業の一環として布教をすすめてきた修道会に対する疑問から出たことと言うべきだと思う。また、そのような修道会を主体とした布教体制の枠外で日本人が知見をひろめ、学問を身につけて聖職についてゆくことを、ヨーロッパ人イエズス会士は警戒し、そのような動向を助長するアラキは、教会秩序を攪乱する危険人物とされ、憎悪の的になったものと言えよう。

四

マカオにしばらく滞在した後、彼は帰国するが、一六一六年三月二十日付長崎発、ジェロニモ・ロドリゲスの総会長宛て書翰に次のように記述されている。

「ローマで叙品された日本人教区司祭トマ・アラキ即ちペドロ・アントニオがこのナウ船で帰ってきた。彼の威厳と名

誉について、当地でいろいろ言い立てられた。彼自身に何かそう言われるだけの理由があった。もしも誰か他にこのような者が御地に行っても、叙品されないで当地に送られてくることは確かであろう。⁽¹⁷⁾」

日本に帰ってきたトマス・アラキについての最初の印象として、彼の威厳とか名誉とかいった事柄がイエズス会内で話題になったというのは興味深い点であって、前述のような意味からヨーロッパ人イエズス会士がアラキに対して抱いていた反感を感じることが出来ると思う。右のロドリゲスの記述から、アラキが帰国したのは一六一五年八月であつたと推定出来るが、その後一六一九年八月長崎で捕えられるまでの四年間の、彼の教区司祭としての活動については、殆んど判っていない。ただ、彼が帰国した当時は、セルケイラ死後の日本司教位の継承をめぐる、イエズス会と托鉢修道会との間で激しい抗争が行われていた最中であつた。当時日本には教区司祭が七人いたが、これがまた二派に分れ、長崎の教会の小教区主任司祭であつた四、五人はイエズス会士を司教区管理者に選出したのに対し、他はこれを無効だとして托鉢修道士を選ぶ、といった有様であつた。⁽¹⁸⁾ トマス・アラキは、帰国後直ちにこの「教会分裂」問題に直面せざるをえないことになり、そしてそれはまた、ポルトガル、スペイン両植民帝国を背景にした各修道会の利害に蹂躪されている感すらある日本教会の現状に対する彼の疑問を⁽²⁰⁾一層強める結果となつたことであろう、と推測する。そしてアラキは、同じ教区司祭ではあつても、各修道会派に荷担してその抗争にまき込まれているような同僚達とは、はっきり一線を画していたと言えるのではないであろうか。

彼の逮捕とその直後の動きについて、一六二〇年二月六日付日本発、パシエコの総会長宛て書翰に次のように記されている。

「この教区司祭は一六一九年八月長崎で信仰の故に捕えられ、つながれて同市の異教徒の奉行権六殿ゴロクダの前に連れて行かれた。或る夜奉行所から脱走した。しかし何によって心を動かされたものか知らないが、二日後ローマ・セミナリオの服

を着て上述の奉行の前に姿を現した。奉行は彼を大村の牢に送った。⁽²¹⁾」

ここに記されている、彼がローマ・セミナリオの服を身につけて長崎奉行の前に出頭したということは、在日修道会とは関わりを持たないカトリック聖職者だという自覚と、ローマ留学の経歴に対する自負とを示していると言えないであろうか。その後アラキは、二〇日間牢に入れられて後自ら信仰を棄て、釈放を願っている。右に引用したパシエコの書翰は、次のようにつづいている。

「彼は常に理性が乏しかったが、大凡二〇日間牢に入れられて、も早全く理性を失ってしまったことを示した。即ち、苛酷な狭い牢に耐えられず、異教徒の奉行に対し、自分は信仰と司祭の地位を棄てた。もう主キリストの法を説くことはしない。というのは、自分はローマで勉強して、キリスト教徒達の法の中には確実なことは何もないということが判ったからである、と書き送って、牢から釈放してくれるよう求めた。」⁽²²⁾

これは恐らく一六一九年九月頃のことと思われるが、その後彼は背教者として長崎奉行に協力しながら生きることになる。アラキが奉行の下でこれに協力したことについては、一六三七年九月までは、明確にその事実が記録されている。この間長崎奉行は、トマス・アラキに対し、厳しい監視下に置きながら、その特異な経歴と知識をいろいろな方面に利用しているが、それは大凡次のような事柄に大別することが出来る。即ち、第一に、ヨーロッパの事情やキリスト教について情報提供者としてであり、第二に、国内のキリスト教徒、それも特に外国人パードレの穿鑿に対する協力者として、そして第三には、ポルトガル船の取調べに対する協力者としてであった。

五

第一の、ヨーロッパの事情やキリスト教に関する情報提供としては、例えば一六二〇年三月二十日付長崎発、マテウス・

デ・コーロスの総会長宛て書翰に次のように記されている。

「権六は彼〔トマス・アラキのこと——引用者〕に、ポルトガル人とスペイン人が日本征服を企てたら、オランダ人は彼等と連合するであろうか、と尋ねた。それに対して彼は、皆一軒の家の中の犬のようなものだ。はたがこれを守ってやらないと、互に喧嘩をして咬み合いをするが、見知らぬ者から身を守ったり、これを襲ったりするためには、皆力を合せ、と答えた。これによって権六は將軍シヨウケンと同じ考えを一層強くしたものと思われる。これは將軍の父も抱いていたことである。即ち、われわれがキリストの法を説く意図は、キリスト教徒達の助けをかりて、この日本諸島をスペイン国王又はヨーロッパの諸侯に従わせるためだ、というものである。⁽²⁸⁾」

前に述べたように、キリシタン布教は植民列強の国策ではないか、という強い疑問をアラキは抱いていたと考えられる。右のコーロスの書翰に見えているような発言も、このような疑問から出たことであつたと言えよう。

アラキが与えた情報は、国外のこと許りではなかつた。一六二〇年二月六日付日本発、パシエコの総会長宛て書翰には次のように記述されている。

「トマス・アラキは」権六殿から好意を寄せられていた時に、ヨーロッパと日本について知っていることを権六殿に話し、更に、長崎を統治している四人の頭で、イエズス会の大敵である当安——この人物については既に猯下の許に充分情報タイコが寄せられている——が、五年前大坂で起つた戦いにおいて、日本の先の支配者太閤タイコの息子秀頼に対して、人員と食糧の面で支援をすることを企てた、ということ告げた。権六殿はその凡てを將軍とその重臣達に伝えた。というのは、彼が着いて三、四日して二つの結果が生じたからである。第一は、京都ミヤコの光榮ある殉教者達の火刑であり、第二は、当安とその息子達の死と彼等の凡ての財の没収とであつた。当安の死については他にも原因があるが、事情に通じている人々は、それは彼が秀頼と関係があつたからだと言っている。処罰の種類がそれを示している。というのは、彼の子孫を凡て

殺すよう命じたからである。⁽²⁴⁾」

即ち、アラキが長崎奉行権六に対し、長崎代官村山当安が大坂の陣に際して秀頼方を支援した旨を通報し、権六はそれを將軍に伝えたという。村山当安の息子の一人がフランススコという名の教区司祭であって、当安自身が秀頼を支援した許りか、この息子も大坂城内にあって活動した事実そのものは既に古くから知られており、『大日本史料』第十二編之三十二にもその関係の史料が収録されている。ここで問題になるのは、トマス・アラキがその事実をどうして知っていたか、という点である。当安の息子の一人が同じ教区司祭であったので、アラキがこれと接触があったことは当然考えられる。一六二〇年三月二十日付長崎発、コーロスの総会長宛て書翰に、「トマス・アラキは」当安の長子に対して、パードレ達が説教している法は良いが、彼等の意図はこのような手段で日本を自国の国王に従わせることにある、と語った。⁽²⁵⁾と記されている。また一六二一年三月十五日付日本発、コーロスの総会長宛て書翰には、「トマス・アラキは」当安の家で——その場にいたある重要人物の言う所によれば——キリストの法は真実であるとしても、これを日本で広めようとするパードレ達の意図は、日本を自分達の国王に従わせようというものである、と語った。⁽²⁶⁾と記述されている。アラキが村山父子とかなり交渉があったこと、しかもイエズス会から離反してスペイン系托鉢修道会士と緊密な結びつきが出来ていた村山一族との間で布教事業に対する見方が対立し、この点をめぐって突詰めた論争が行われた様子を推測することが出来る。従って、大坂の陣に際しての村山一族の動向について彼がかなり詳しく知っていたとしても、充分うなずけることと言えよう。但し、アラキはその情報を当安の敵対者である長谷川権六に末次平蔵側に提供し、結果的にその利益になる行為に出ている。この、アラキが当安方を決定的に破滅に陥れるであろう情報を、権六に平蔵方に通報したのは何故か、という問題——その点については後で触れる——と共に、何時それを行なったか、ということも重要な点である。前引一六二〇年二月六日付パシエコの書翰の記事では、この点不明確である。ここで村山当安と末次平蔵との間の抗争の経過をみ

てみると、平蔵が当安の私曲を告発したことに端を発した争いは、その問題だけでは極め手にはならず、後に当安の息子がキリシタンの司祭であつて大坂の陣に際して大坂城内にいたこと、更に当安が大坂方を支援したことが露顕するに及んで当安方の罪科が決定的となり、その一族が処刑されるに至ったわけであるが、イギリス商館長リチャード・コックスの日記一六一八年八月十九日（新曆二十九日）の条に、「当安殿は訴訟に敗れ、自分の財産を凡て没収された。彼の生命は皇帝の意の儘である。」⁽²⁷⁾と記されており、その時には既に当安方の敗北が決していたことが判る。（村山父子の処刑は一六一九年十一月中旬から同年十二月一日にかけて行われた⁽²⁸⁾）。一方アラキの逮捕は一六一九年八月で、棄教は恐らく同年九月頃のことであつた。即ち、アラキが村山一族の破滅を決定づけるような情報を奉行の権六に密告したのは、まだ逮捕される以前のことであつたと言わねばならない。この件の情報提供者がアラキ一人であつたか否かは不明であるが、少く共キリシタン教会聖職者アラキからの密告は、まさにこの争論の帰趨に決定的な影響を与えたと言つてよいであらう。ではアラキは何故当安の失脚を凶つたのであらうか。この点、権六・平蔵側からアラキに対していかなる働きかけが行われたか、そしてアラキは密告することによつてどのような利益を受けたか、といったような点については、それを明確にしうる史料を見出すことは出来ず、臆測の域を出ない。ただ強いて推測すると、むしろ村山当安の方に重要な問題点があつたのではないであらうか。当安に対しては、イエズス会士達が「裏切者」「背教者」と呼んでいるのは対照的に、ドミニコ会の記録では、彼は「殉教者」として称えられている。どうみても殉教者と呼ぶには無理がある当安のことをこう強弁しているところに、却つてドミニコ会側の意図に不純なものが感ぜられるが、このことは、村山一族がドミニコ会等スペイン系托鉢修道会との關係に相当深入りしていたところに帰因することは明らかである。そして、当安がイエズス会から離反して托鉢修道会の方に走つた主な動機は、長崎統治の実権掌握と、それと緊密に結びついている海外貿易の利益獲得の問題にあつたとみてよいであらう。当安は長崎からイエズス会の勢力を駆逐して、代つてスペイン船と托鉢修道士を誘

致しようとしたようである。イエズス会から托鉢修道会に乗り換えようとしたその仕様に余りに露骨で強引なものがあつたことが、結局自らの破局を招く遠因となつたといえよう。そして余りにスペイン系托鉢修道会との関係に深入りし、それを利用して自らの利権の確保を図つた村山一族の振舞いは、明らかにトマス・アラキの志す所とは違つていたと言へる。アラキの密告は、村山一族の破滅を決定づけるものであつただけでなく、それは一見、相対する末次平蔵に対して接近していたイエズス会側を利するものであるが、権六||平蔵は、むしろこの争論の過程で明らかにされたデータを基に、長崎を中心にイエズス会を含むキリシタン弾圧を行い、教界勢力の弱体化を図つた。棄教したアラキは、日本に潜伏しているパードレについて幕府に通報し、これに協力している。即ち、一六二〇年二月六日付パシエコの書翰には、それについて次のように記されている。

「権六殿は同じ船で彼〔トマス・アラキのこと——引用者〕を上カミに連れてきた。彼と一緒に食事をしたり、その他多くの優遇をした。それは日本の支配者將軍シヨウグンに彼を謁見させるためであつた。私に書き送られてきたところによると、彼は上(29)に着いて、日本にいる凡てのパードレの名簿を提出し、どの国のどこの家(29)にいるかを明らかにした。」

*

*

*

長崎奉行に対する協力の第二として、奉行は外人宣教師を捕え、詮議をすすめる過程で、アラキの、曾てローマに留学して司祭にまでなつた経歴やその勝れた語学力を大いに役立てている。その事例としては、一六二〇年から二二年にかけての平山常陳事件において、スペイン人宣教師等の詮議に當つて、証人・通訳、更には棄教を勧める役として働いてい(30)る。更に、同事件につづく長崎でのキリシタン搜索において、アラキは中心的役割を果している。即ち、一六二三年三月十五日付マカオ発の一六二二年度年報に次のように記述されている。

「先の殉教が行われた〔一六二二年〕八月十九日の朝八時か九時から九月十日まで、当市〔長崎のこと——引用者〕に

おいて犬がかりな協議と多くの強襲が行われ、司直達が異教徒の兵士達を従えて住民の家々に入った。それが誰であるか、いかなる地位であるかなどは意に介さなかった。そして家々の最も奥まった秘密の所まで搜索した。修道士又は彼等の物がなにか調べるためであった。これは凡て、ペドロ・アントニオ・アラキという名で御地、更にローマにおいても知られている背教した一日本人教区司祭の策謀によるものである。彼は、今一人のユダであるかのように、間諜達や司直達の頭目となっている。⁽³¹⁾」

次に、一六二二年十月に薩摩に再入国したフランシスコ会士ルイス・ソテロの取調べにアラキが関係している。一六二三年二月九日付日本発、コーロスの総会長補佐宛て書翰に次のように記述されている。

「権六は、背教した教区司祭と彼〔ソテロのこと——引用者〕と一緒に政庁の中に呼んだ。この背教教区司祭を介して、彼は或る要人と話しをした。この人物について私は聞いたことがある。同修道士は、スペインと伊達の領土との間に直接の航海を開くために政宗が自分をスペインに派遣したということや、その他多くのことを、こういった調子で話した。奉行はそれをすべて書きとめ、その末尾にフライ・ソテロに署名をさせた。同背教者の言うことが真実ならば、その内のいくつかは、日本の多くの重立った領主に関わるかなり厄介なことであって、⁽³²⁾ 將軍の耳に入ったら彼等に非常な害が及ぶことであろう、ということであった。」

また一六二六年二月二十四日付日本発、コーロスの総会長補佐宛て書翰に次のように記述されている。

「同奉行は、先日政庁に向けて発つ前に、背教した教区司祭を含む四人の通訳を呼び、ジェロニモ・デ・マセードを捕えて大村の牢に送った時に、その持ち物の中にあつた文書を読んで意味を明らかにしよう命じた。そしてその主旨を翻訳させ、日本の言語と文字で記述させた。それを將軍に報告するためであつた。日本にいる修道士達について述べている何通かの書翰が見出された。⁽³³⁾」

文中に見えるジェロニモ・デ・マセードというのは、宣教師の潜伏を助けた廉で取調べを受けたマカオのポルトガル人であるが、⁽³⁴⁾その所持品の中の欧文文書を、奉行がトマス・アラキ等四人の通訳に調べさせ、邦訳させている。

一六三三年十月二日に殉教した⁽³⁵⁾イエズス会日本人パードレ・パウロ・サイトーに対しても、その最後の場面においてアラキが相對している。一六三四年五月二十日付カンボジャ発、イエズス会パードレ・マヌエル・コエリョの日本教界とくに日本人に関する報告書に次のように記されている。

「二日二晩彼〔パウロ・サイトーのこと——引用者〕を責めるよう役人達によって送られた背教した日本人教区司祭トマに対し、彼は神の側に立って次のように哀願した。あなたとは一緒にいたくない。向うに行ってもらいたい。何故なら、あなたは神の教会の腐った肢体だからである。自分は今天国にいるから、このままここに居らせてほしい、と。⁽³⁶⁾」

更に、一六三六年四人のドミニコ会パードレ（パードレ・フライ・アントニオ・ゴンサレス、パードレ・フライ・ギリエルモ・コルテ、パードレ・フライ・ミゲル・デ・オサラサ、パードレ・フライ・ビセンテ・デ・ラ・クルス）がフィリピンから日本潜入を志し、まず琉球に上陸したところ、そこで捕えられ、翌一六三七年一行は琉球から薩摩に連行され、同年九月十三日長崎に連れて行かれた（四人のパードレの内、アントニオ・ゴンサレスだけは、他の三人とは別の船で後から長崎に送られた）。そこで早速奉行所の取調べが行われたが、その場にアラキがいたこと、そしてパードレ・オサラサに向ってラテン語で背教を勧めたのに対し、パードレはアラキに対し、「あなたはラテン語を話すのだから、それが理解出来るに相違ない。またあなたは背教者に違いない。あなたはラテン語で上手に話しをしたが、その内容は大変に悪い。」と答えたことが、ドミニコ会の文献に記録されている。⁽³⁷⁾

次に、第三の、長崎奉行によるポルトガル船取調べに対する協力というのは、幕府は一六二〇年代半ばから、ポルトガ

ル船に対して人的・物的の両方から嚴重な取締りを行うようになり、長崎奉行自らがポルトガル船に乗込んで取調べを行なったが、その際にトマス・アラキを伴ったことが判っている。一六二五年十月三十日付日本発、コーロスの総会長補佐宛て書翰に、「ガレオタ船が着くと彼〔長崎奉行のこと——引用者〕は自ら、背教した教区司祭を連れて赴き、マカオの名簿に基づいて一人づつ全員を調べた。」と記述されている。³⁸⁾

更に、一六二六年十月五日付日本発、コーロスの総会長宛て書翰には次のように記されている。

「〔奉行によるポルトガル船穿鑿により〕物を送る際に迫害者達の手で抑えられる危険があるので、私は多くの物を放棄することになる。彼等は、船が出港する際にも、入港の時に行なったのと同じ取調べを行う公算が極めて大きい。禁ぜられていた人々が当地にいるのをつきとめ、何処に彼等がいるかを知るためであった。書翰やその他の文書の翻訳には、奉行は背教した教区司祭と別の背教者を主として使っている。彼等はわれわれ全員を非常によく見知っている。」³⁹⁾

*

*

*

以上述べてきたように、トマス・アラキは、ローマにかなりな年月留学した体験、元教区司祭としてカトリック教・同教会・宣教師等について持っていた知識、及び勝れた語学力等によって、長崎奉行のキリシタン取締りにいろいろな面から協力している。アラキのような経歴と知識を持った人物は、奉行がその施策をすすめてゆく上での協力者として誠に貴重な存在であった、と言える。それだけにまた、キリシタン教会の側から見ると、アラキはまさに憎むべき人物であったことになる。一六二〇年二月六日付日本発、パシエコの総会長宛て書翰に、「暴君がこのように残忍になった原因は、私には確かなところは判らないが、事の結果から判断するに、それは、ローマで司祭に叙品された日本人教区司祭トマ・アラキが首尾よくやったことだと思ふ。」⁴⁰⁾と記されている。また、一六二三年三月十二日付長崎発、フアン・パウティスタ・デ・バエサの総会長宛て書翰に、「御地で叙品され、多大の恩恵を受けた日本人教区司祭ペドロ・アントニオは背教し、

目下当キリスト教界と修道士達にとっての最大の敵である。」⁽⁴¹⁾と記述されており、キリシタン教会側がアラキのことをどう見ていたかをよく示している。

六

トマス・アラキの最期についてであるが、彼が再び信仰に立返り、殉教者として死んだことを伝える記録がいくつかある。その記事は、オランダ史料と教会史料の双方に見られる。まずオランダ史料では、長崎オランダ商館長ウィルム・フェルステーヘンの日記一六四六年十一月十七日の条に、次のように記述されている。(傍点引用者)

「私は当地日本に到着した時から、背教パードレたちの事について聞きたいと何度か試みた。トーマという日本人は、イタリアのローマで教皇の下に長い間滞在した侍従であるが、その後監禁されていたと言われる。即ち、彼は自分がキリシタンであることを再び認め、自らそのことを届け出た。奉行は彼が高齢であることを考慮し、彼は実際にキリシタンであるというより、むしろ軽率な者であるという意見で、これ以上の嫌疑をかけず、ただ監禁させておいた。その間に彼は病氣となり、息をひきとり死んだ。以前彼は一昼夜以上足で吊されたが、尚死ななかつたので、棄教したが、心中では頑なに信仰を守っていた。」⁽⁴²⁾

この記事は、彼が晩年再び信仰を表明してその後殉教したものと解しうる史料であろう。

一方教会史料としては、一六四九年五月二日付トンキン発、イエズス会パードレ・ジョヴァンニ・フィリップポ・デ・マリーノの総会長宛て書翰に次のように記されている。

「日本で一四人の日本人が殉教した。その中にトマソという名の、ローマで叙品された司祭が含まれている。彼は二〇年前から今まで背教者であったが、その後悔改め聖なる死に方をした。」⁽⁴³⁾

何時の出来事か記されていないが、書翰の日付を溯ること余り遠くない時期に、トマス・アラキが信仰を取戻し、他の一三人の日本人と一緒に殉教したという。

このマリーノの書翰よりも一層詳細に記述されているのが、「最近の一六四九年度年報から抜萃した日本、アイナン〔海南〕島、カンボジャ、マカサル等の布教についての報告」と題する記録である。各地の布教報告であるが、その日本の所でトマス・アラキの略伝とその死を伝えている。アラキの伝記的記述として恐らく最も古いものに属するのではないかと思うので、その関係記事の全文を次に訳出しておく。

「トマン様サマという名の日本人はパウルス五世の時にローマに來た。非常に勝れた他の才能の外、充分な學問を身につけたことを示したので、われわれ会員は、彼のために司祭叙品の許可を得てやった。その權威により、彼は精神と情熱に非常な高まりを見せ、聖ベラルミノ枢機卿が彼を屢々招いた程であった。彼に会い、これと話しをすることによって慰めを得るためである、と枢機卿は確言した。靈的なことについて彼と長時間話し合つて後に、彼と共に聖務日課を唱えた。ローマで得た恩寵に充滿し、彼は日本に戻つた。自分がかの聖都で體驗した信仰と學問の偉大な模範によって教化され、そして殊に自分の野蛮な故国において信仰を守り、説教したいという氣持が横溢していた。しかし、そこに着くや、有徳の生き方をしている人の目から逃れるためか、拷問に対する恐怖のためか、或は神の隠れた判断によつてか、恩寵の有効な助けも甲斐なく、トマンは背教し始めた。短期間の内に、司祭だけでなくキリスト教徒としての義務も忘れ、キリストの公然たる敵、日本の憎むべき神である神カミスとフォトケスの仏の大的擁護者たることを言明するに至つた。大凡三〇年この瀆聖の状態の中に生きた。その蹟きは、益々大きくなることが考えられる。ついにいとも恵み深い主は、この哀れな人に同情し、次のような機会に彼の心を動かして下さつた。日本において、一六四九年に一四人のキリスト教徒が信仰の故に死んだ。その場にこの無信仰の背教者が居合せた。この犠牲的行為の際中に彼の心が変わり、法の執行者達を刺戟して残忍な行為に仕向

けた。即ち、彼等を公然と非難し、威すようなことを言った。そして彼等に対し、判決の不当なこと、永久の罪を受けることを言明した。周囲の人々は予期しない結果に驚き、兵士や役人達は、この新しい説教者を黙らせようとした。しかし、そうすればする程、トマソの心の炎は益々燃え上った。このため、彼は益々声を張り上げ、一層強い息吹と活力で以って、哀れな偶像教徒達が誤りの中に暮していることを言いつづけた。そして知識で知らなかったからではなく、自分の意志によりその時迄墮落した生き方をしてきた、と言って、その誤りを叫びつづけた。こうすることによって、自分がキリスト教徒でありカトリック教徒であることを主張した。それだけでなく、自分の信ずる唯一の眞の信仰を擁護し、救主に対して加えられた侮辱と、日本全国に加えられた重大な弊害に対して償いをするために、刀・墓穴・十字架・炎に身を捧げた。異教徒達の多くは、彼が理性を失ったものと信じた。そして彼のことをそのように扱いはじめた。しかしトマソは卒直な言葉で、自分は完全に理性を備えている、と告白した。そして、三〇年間も材木と悪魔を崇拜してきたこと以外には自分の狂気を認めない。その点だけを悲しむ、と述べた。その内に庄屋(シヨヤ)(最高審議会の如きもの)の人々に、事の経緯が報ぜられた。彼等は、その者を連れてくるよう命じた。彼は、何ら恐れることなくそこに行き、いとも卒直に語った。いくら黙るよう命ぜられても、迷信を非難しキリスト教を擁護する発言をやめようとしなかった。ここでも彼は狂人とされた。そしてそのために好運はえられなかった。しかし、彼が、自分を釈放して公衆の中に出してくれるよう叫び、聖信仰を冒瀆してきた言行を凡て打破したい、と断言するのを見て、審議会員達はそれによって民衆の蜂起と騒動が誘発されるのを恐れ、彼を牢につなぐよう命じた。そこで彼に何日も難儀な生活を強いて、今一度以前のような心変りを起させようとした。しかし彼の意志は固く、甘言や威しではその言を取消させることの出来ないのを知って、彼を牢に戻した。その中で、この幸せなトマソ様は、寒さ、飢え、その他それ以上の苦しみによって間もなく死亡した。⁽⁴⁴⁾

このように右の報告書は、一六四九年一四人の信徒の殉教を目撃したのが契機となってアラキは信仰を取戻し、そのま

ま殉教したように伝えている。

以上のようにアラキが晩年信仰に立返って殉教したことを伝える史料はいくつかあるが、そのいずれもが伝聞が基になっている記録と言ってよく、余り良質の史料とは言えない。アラキの死亡の年すらも、オランダ側の商館長日記の二六四六年に対し、最後に挙げた教会史料には一六四九年のことになっており食違いを見せている。教会史料といっても、恐らくその情報源はオランダ側の記録なり伝聞なりであったと推測出来る。とくに最後の二六四九年度年報に基づく報告などは、何らかの史実の反映があるにしても、それに潤色を施して殉教物語に構成した公算が強い。アラキの殉教については、これだけの史料で以って確言することは出来ないが、前述のように、トマス・アラキが棄教したのは、植民列強を背景にした布教体制に対する疑問が主な原因であったという考え方に立つなら、彼は、キリスト教信仰そのものは棄て切っていないで、それが晩年何らかの契機で表面化したこともありえたのではないかと思う。

註

- (1) Daniello Bartoli, *Dell'Historia della Compagnia di Giesù, II Giappone*, Roma, 1660, lib. IV, pp. 41-43.
- (2) Charlevoix, *Histoire et description generale du Japon*, t. II, Paris, 1736, liv. XIV, pp. 232, 233.
- (3) この所原文には、第一便書翰・第二便書翰共に P. Antonio (即ち「パドトニオ」と記されている。明らかに「パードレ・アントニオ」で問題ない筈であるが、ただこれが P. Antonio (即ち「パドロ・アントニオ」)の誤記だという可能性も皆無ではない。そして、これもさうだとすると、この史料で以ってアラキの司祭叙品の時期を云々することは出来ないことになる。しかし、ここで
- (4) Archivum Romanum Societatis Iesu, Jap. Sin. 15-II, f. 166, 169.
- (5) Jap. Sin. 15-II, f. 166.
- (6) 「異国御朱印帳」(東大史料編纂所)。村上直次郎訳註『異国往復書翰集・増訂異国日記抄』駿南社、昭和四年、附録三〇一頁。
- (7) C. R. Boxer, *The Christian Century in Japan*, University of California Press, 1967, p. 263.
- (8) J. Murdoch, *A History of Japan*, v. II, London,

1925, p. 690.

- (6) C. R. Boxer, op. cit., p. 263.
- (7) J. F. Schütte, *Introductio ad Historiam Societatis Jesu in Japonia*, Romae, 1968, p. 234.
- (11) *New Catholic Encyclopedia*, v. XIII, pp. 72-75. M. Barbera, "L'origine dei seminari a norma del Concilio di Trento", *La Civiltà Cattolica*, 91-III, 1940, pp. 215-221.
- (12) *Jap. Sin.* 15-II, f. 301v.
- (13) 一六一四(一六一五の誤か)年一月三日付マカオ発、ピエトロ・アントニオ・アラキのイエズス会総会長宛て書翰。*Jap. Sin.* 16-II, f. 1.
- (14) *Jap. Sin.* 36, ff. 113v, 114.
- (15) 高瀬弘一郎「キリシタンと統一権力」(『岩波講座日本歴史近世』一九七五年)二二四頁。
- (19) *Jap. Sin.* 35, f. 137. 一六二一年三月十五日付日本発、ローソの総会長宛て書翰にも略同じ記述が見られる(J. L. Alvarez-Taladriz, "La razón de estado y la persecución del cristianismo en Japón los siglos XVI y XVII", *Sapientia*, no. 2, p. 66. 佐久間正訳「十六・七世紀の日本における国是とキリシタン迫害」『キリシタン研究』第十三輯(十一頁)。
- (21) *Jap. Sin.* 16-I, f. 305v.
- (18) マカオから定航船が長崎に入港したのは一六一五年八月であつた(C. R. Boxer, *The Great Ship from Amacou*, Lisboa, 1959, p. 86. 及び一六一六年三月二十日付長崎発、シロニモ・ロドリゲスの総会長宛て書翰。*Jap. Sin.* 16-I, f. 305.)。
- (19) *Real Academia de la Historia*, Cortes 566, f. 233.
- (20) 修道会間の抗争に対する疑問は、アラキ自身既にローマにおいて表明している。即ち、彼がローマを発つに當つて教皇に書き送つた書翰(日付不明)の断章がシュッテ神父によつて紹介されているが、そこには、「日本教会は、既に以前から、未信徒の王侯の残忍な振舞いよりも、むしろ内部の分裂によつて攪乱されている。というのは、托鉢修道士とイエズス会士との間の関係がよくないからである。」と記されている。ここにも、修道会中心の日本教会のあり方に対する彼の不信がよく表わされていると言へよう(J. F. Schütte, "Wichtige Japandokumente in einem Band der Propaganda-Kongregation im Staatsarchiv von Florenz", *Archivum Historicum Societatis Jesu*, v. XXXV, p. 235. 今治カトリック教会ホセ・デルガド・ガルシア神父のご厚意により、右の書翰の部分のコピーとそのスペイン語訳文とを送っていただいた)。
- (21) *Jap. Sin.* 38, f. 58. (J. F. Schütte, *Monumenta Historica Japoniae I*, Romae, 1975, p. 827.)
- (22) *Jap. Sin.* 38, f. 58. (Schütte, *Monumenta*, p. 827.)

- (23) Jap. Sin. 35, f. 137. 一六二一年三月十五日付日本発、コロスの総会長宛て書翰にも同じ主旨のことが記述されている (Alvarez-Taladriz, "La razón de estado", p. 66. 佐久間正訳「十六・七世紀の日本における国是とキリシタン迫害」十一頁)。
- (24) Jap. Sin. 38, f. 58v. (Schütte, Monumenta, pp. 827-830.)
- (25) Jap. Sin. 35, f. 137.
- (26) Alvarez-Taladriz, "La razón de estado", p. 66. (佐久間正訳「十六・七世紀の日本における国是とキリシタン迫害」十一頁)。
- (27) Diary of Richard Cocks, v. II, Tokyo, 1899, p. 69. 『大日本史料』第十二編之三十二、二九五頁。
- (28) J. L. Alvarez-Taladriz, "Fuentes Europeas sobre Murayama Toan (1562-1619)", 1. (『天理大学学報』五一輯) 一〇〇・一〇一・一一二頁 (佐久間正訳「村山当安(一五六二—一六一九)に関するヨーロッパの史料」、『日本歴史』一三五号、八七・九七頁)。
- (29) Jap. Sin. 38, f. 58, 58v. (Schütte, Monumenta, p. 827.)
- (30) Diego Aduarte, Historia de la Provincia del Sancto Rosario de la Orden de Predicadores en Philipinas, Japón, y China, Manila, 1640, lib. II, cap. XIX, pp. 123-125. Léon Pagés, Histoire de la Religion Chrétienne au Japon, première partie, Paris, 1869, pp. 481, 483, 497. (皆田小五郎訳『日本切支丹宗門史』岩波文庫、中、一八三・一八五・二一一・二一二頁)。
- (31) Jap. Sin. 60, f. 11, 11v.
- (32) Jap. Sin. 37, f. 217.
- (33) Jap. Sin. 37, f. 233v. (Schütte, Introductio, pp. 248, 249.)
- (34) Boxer, The Great Ship, pp. 128, 129.
- (35) Schütte, Monumenta, p. 1267.
- (36) Jap. Sin. 18-I, f. 148v.
- (37) Diego Aduarte, op. cit., lib. II, cap. LX, pp. 407-411.
- (38) Jap. Sin. 37, f. 229v.
- (39) Jap. Sin. 37, f. 237, 237v. (Schütte, Introductio, p. 250.)
- (40) Jap. Sin. 38, f. 58. (Schütte, Monumenta, p. 827.)
- (41) Jap. Sin. 34, f. 112v.
- (42) Dach Register van anno 1646 en 1647. (東大史料編纂所架蔵の複製写真による。この史料の閲覧について五野井隆史氏のお世話になった)。引用箇所は永積洋子氏の厚意により邦訳していただくことが出来た。
- なお、文中の「侍従」の原語は Camerlingh である。この言葉は一般には「侍従」を意味するが、カトリック教会用語では「枢機卿の首座」の意味で用いられる (Kruyskamp, Groot

Woordenboek der Nederlandse Taal, 1961.)。しかし、ここでは史実に即して考えて「侍従」の意味が適切だと思ふ。この点、加藤栄一氏からお教えを得ることが出来た。

また、村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』第二輯、岩波書店、昭和三十二年、一一七・一一八頁も参照した。

(43) Schutte, *Introductio*, p. 373.

(44) *Jap. Sin.* 65, ff. 2v.-4.

(本稿の作成に当って特にお世話になったホセ・デルガド・ガルシア神父と永積洋子氏に厚くお礼申し上げます。)